

29【P2】Ⅱ-303

日本及びアメリカの薬学教育に関する薬学生アンケート調査とカリキュラムの比較～学生から見た日本の薬学教育の現状と展望～

○山田 友子¹, 向後 麻里¹, 木津 純子², 小林 静子², Teresa O'Sullivan³, Wayne A. Kradjan⁴, 木内 祐二¹(¹昭和大学,²共立薬大,³ワシントン大学,⁴オレゴン州立大学)

【目的】高度医療体制に対応できる薬剤師の養成は、現在日本の社会的要請となっている。一方、米国ではファーマシューティカルケアの概念が定着しており、患者中心の最適医療を実践できるような薬剤師教育が確立されつつあるが、この教育方針をそのまま日本に導入すべきかという検討はされていない。そこで私は、米国 Pharm D program を実際に体験し、日米両国の薬学生に、薬剤師像や教育内容に関するアンケート調査を行い、日本の今後の薬学教育について検討を行った。

【方法】①オレゴン州立大学 Pharm D program、学生米国薬剤師会（APhAASP）へ参加、教授団との対談、病院・薬局見学を行った。②オレゴン州立大学、ワシントン大学、昭和大学、共立薬科大学の薬学生を対象にアンケート調査を行った。

【結果】①米国では、早期から頻繁に医療現場を想定した問題解決型討議や実務実習が組み込まれており、学生は低学年から段階的に薬剤師の役割、医療チームへの関わり方を学んでいる。②米国薬学生 203 名（オレゴン州立大学 166 名、ワシントン大学 37 名）から回答が得られた。学生は大学における薬剤師教育に満足しており(85%)、薬剤師は人生において有意義な進路となる(99%)と回答した。

【考察】米国で早期から薬剤師業務の理解を目的としたセミナーや小グループによる統合型演習や実務実習を行うことは、社会の変化に対応できる薬剤師育成への手助けとなると思われた。医薬品情報の検索、吟味能力の取得、関連学会への参加、など卒後の継続的自主学習を見据えた教育方針は、薬剤師が知的探究心を維持し、卒後、教育指導者として活動するために不可欠であり、今後新しいカリキュラムを作成する中で、参考にすべき点であると思われた。